

特242

498

昭和十七年六月

精神科學研究所要綱

精神科學研究所

大阪事務所

東京市麹町區麹町三丁目六番地
電話九段(33)四四六九番
大阪市西區觀上通二丁目十一番地
電話土佐堀(44)七六八九番



0034607000

0034607-000

特242-498

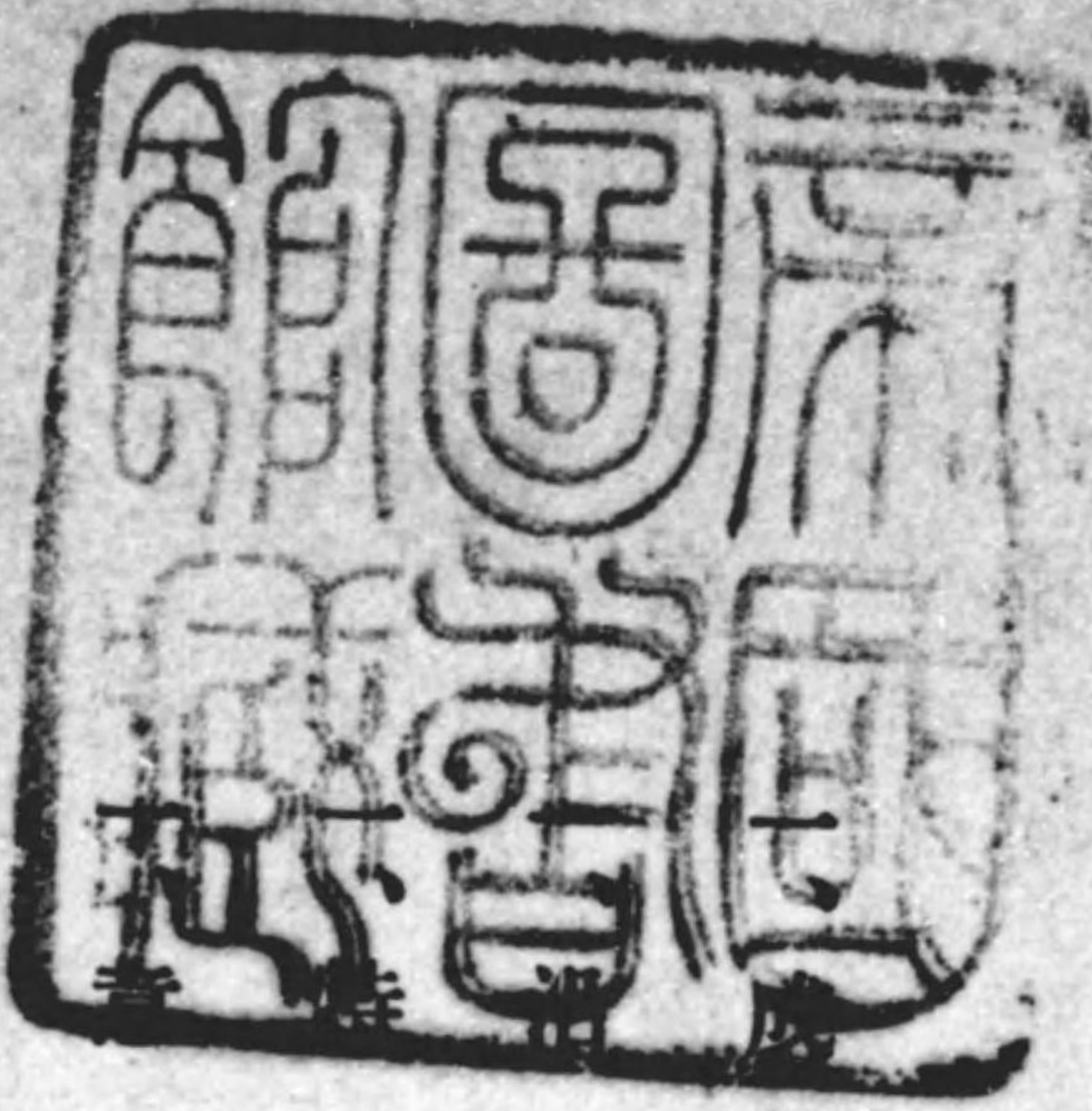
精神科學研究所要綱

精神科學研究所大阪事務所

昭和17

AGC

特242
498



目次

員並經歷	革	質	圖	業	一、事	一、註
.....
一	二	四	五	七		10



精神科學研究所要綱

一、成員並經歷

理事長（兼所員） 田所廣泰

東京帝國大學法學部卒業後、内務省、文部省、國民精神文化研究所、國民精神總動員本部に勤務したるも、昭和十五年春、公職を一切辭し同志と共に研究所を創設す。

理事（兼所員） 四名

高木尙一 東京帝國大學法學部卒業後、東京府立高等學校教授、後之を辭す、以下同前。

下同前。

桑原曉一 東京帝國大學文學部卒業後、外務省調査部、内閣情報部（現情報局）に勤務し後之を辭す、以下同前。

加納祐五 東京帝國大學法學部卒業後、第一銀行に勤務し、後之を辭す、以下同前。

小田村寅二郎 東京帝國大學法學部在學中、かの河合榮次郎教授の人民戰線擁護論に

激し、筆を執りたる廉により退學處分を受け、本研究所に據る。

所員（理事長及理事を除く） 十八名

（姓名及經歷略）

嘱託（姓名略） 五名

助手（姓名略） 二十名

職員 二十名

一、沿革

昭和四年、^(註)かの三・一五、^(註)四・一六事件直後の全日本を蔽へる、マルクス共產主義の疾風怒濤裡に、第一高等學校生徒として、學内に日本精神文化研究團體「昭信會」を組織す。これが現代學術思想改革に志せる發端なり。同會創立後間もなく、これが指導者たりし、^(註)黒上正一郎先生及び、同志會員相ついでこの世を去り、田所廣泰（現理事長）等其の遺志を繼承して同志を糾合す。ついて、東京帝國大學に入り大に爲

すところあらむとせしも中途病に冒され、憂悶の歳月をかさぬ。

昭和十三年に至りて、同じく昭信會出身者たる小田村寅二郎（現理事）等によつて「東大精神科學研究會」結成せらるゝに及び、我等の運動とみに活潑を加へ、その影響下に、學内の同趣旨研究團體の結成せらるゝもの、全國大學高等學校中七十餘校に上る。かくのごとく、「一高昭信會」及び、「東大精神科學研究會」に據つて、傳統をつぎ、感化を普及せしめ來たりしが、その間漸次、學窓を出て世務に従事する者少なからず、よつて「日本學會」なる名のもとに、これら同志結束して、さらに廣く國家社會の上に、活動の分野を、開拓すべく努めしが、支那事變の長期化に伴ふ内外情勢の推移は、積年の禍根たる思想的誤謬に起因して、黙過すべからざるものあるを感知し、これが全面的打開に、邁進せざるべからずと決意し、前進すべくば背後の橋をも焼却すべく、昭和十五年春十餘名の同志一齊に公職を辭し、爾來半歳、幾多の艱難に耐へて、同年十二月に至り、數坪程の一室を借用し、形ばかりの「精神科學研究所」創設せられ、その後、官民識者の後援日を送ひて加はり、規模の擴張、内容の整備をはかりつゝある現状なり。

一、特 質

右の如き沿革の上に、成立せる我が研究所は、その故に、世の常の「研究所」といなくその趣を異にす。彼に於ては、その成員の、寄せ集めたるをまぬかれざるに比し、此に於ては、青年時代の十數年乃至數年を、日夜悲喜を共にし來れるもの、個人的榮達に捨て、かへりみず、思想國防の一途に、戦ひたほれむことを念願して、結集せる一の生命體なり。従つて研究といふも、それぞれ自己の「専門」の城壁に割據して、人生と國家とは、その關心の外に排出するの例にならはず、それらを撤去して、國家最大の問題を、総合的に把握して、そこに全員總力を集中し、その解決に結束挺身せむとす。この故に、「研究所」として、その永續的存在を維持しつゝ、自己を寄生せしめ、義務的に若干の「研究」なるものを發表して、自己の満足を味はむよりもわれらの意圖するところを、一日も早く全國家生活そのものうちに實現し、われら自らそこに没し去らむことを冀ふものなり。しかしながら、同時に、日に新なる學術的研鑽と、潤達自由なる社會的接觸によつて、やゝもすれば、あまりに尖鋭化して、

所謂「自己主張」の偏狹にはしらむことを抑制し、強靱の意志力を把持して、不屈不撓以て所期の目的を達成せざれば已まざるものなり。

五

一、意 圖

われらの意圖するところはいふまでもなく現代思想改革なり。それなくしては、現代は窒息して開展することなし。研究所創設以來、われらが主として研究の對象としてそれが打開に献身せる問題は、流行戦争論、及びそれと密接不可分の關係にある、國防國家論、計畫經濟論、國防文化論、すなはち、革新論と概括せらるる、一聯の思想系統にして、そこに共通せる一元的統制意志は、かつての個人主義、自由主義、唯物主義の批判克服者と自稱すれども、その實は、その形式的反動にして、そこに支配的なるものは、マルキシズムの思考法なることは、われらが研究の結論として、斷言して憚らざるところなり。しかし、それは自らをあからさまに主張するよりも、巧に時代の要求に結合し、日本の表現に依託せるをもつて、徹底せる思想批判力を有せざる限り、知らず識らずそれを容認肯定して、その歸趨するところを察知すること能はず。

このことは、他面時代の誤りを正す上に於て、たゞ非を非とし、是を是とする如きことにては、容易に受けつけられず、所謂一筋縄では行きかぬるものあり。

その動機を推し、その意向を察し、生かすべきは生かしつゝ、而もそこに、自ら氣づかずして臨みつゝある陷穽よりまぬかれしむる、これ必ずしも容易の業にはあらず透徹せる識見と、捨身の勇氣とを、兼備せる者にして、初めて可能のことなり。われらすでに、斯のごとき者を自負するにはあらねど、それを意圖し念願しつゝ、前進し來り、さらにまた、前進を急速ならしめむと欲す。

この時代の病根を、剔抉快癒せしむることなくして、國家の將來は斷じて祝福せらるゝことなし。戦果大いに擧がるの日、爲に却つて、この根本問題にして背後に押しやられ、視野より見失はれることあらむか、そこに不測の事態を招來せむことの危惧にたへざるものあり。殷鑑遠からず、日露戦後、あるひは前世界大戦後における、我國思想界の混亂の、國家生活の上に及ぼせる無量の禍害を想起せば、當時と比類を絶して、深刻なる世界現勢に於て、その結果するものの、何たるかは蓋し想像の外なるべし。われらの意圖するところ大略斯くの如く、われらは思想國防の分野における

六

決死隊、あるひは特殊潜航艇の任務を自らの上に課さんとするものなり。

七

一、事業

われら本来の研究と、それに基く有効なる活動とを不断につゞくることはいふまでもなく、その他特に「事業」として列挙しうべきもの左の如し。

イ、日本世界観大學講座

時代の最大問題につき、それを凡ゆる角度より、分析検討して、我國の誤りなき進路を明示せむとする啓發指導機關なり。東京、大阪に於て、春秋二回開催するの外、仙臺、京都、神戸、福岡等に適宜に開催す。講座期間は三日乃至八日間。昭和十六年秋に開設せられしより現在迄、東京、大阪に於て、各三回、仙臺にて一回、受講人員約四千名なり。受講者中有志をもつて、「日本世界観大學學友會」組織せられ、研究會其他各種行事を設く。

ロ、講演會

時々の要請に應じ、大小適宜開催す。

ハ、思想圖策叢書

時事問題中、注目すべきものを適宜撰擇して、之に嚴密の思想的検討を加へ、關係當局及び特定者の参考に資す。毎週二回以上發行。既刊目錄を掲げて内容の一斑を示す。

農地國家管理法案の矯激性。産業設備管團について。商業は中間搾取か。軍政論の横行に注意せよ。日銀法改革の思想的陰翳。政治力結集の動向に就て。泰國との爲替協定について。等々。

ニ、月刊綜合雜誌「新指導者」發行

現在毎月一萬部發行。一高昭信會時代の「伊都之男建」東大精神科學研究會時代の「學生々活」を相續發展せしめたるものなり。毎號所員之に執筆す。現今の出版機構にては頁數の増加は困難なれども、諸他流行大雜誌との對抗上これが飛躍を企劃中なり。

ホ、研究會

1 學生研究會（月二回）

政治、經濟、文化の三部門に分ち、各部毎に所員一名責任者となりて、研究指導に當る。參加學生は嚴重に選擇し有爲の士の育成を圖る。

2 國民學校教員研究會（月一回）

昨今、是非の風潮滔々たるの今日、一貫して變らざるべき國民的信念を堅持せざるべからざる國民學校關係者の要望に應へ、その共同研究に助力す。

へ、講習會座談會等に講師巡遣

研究所主催にて之を行ふの他、各種講習會、座談會等に講師派遣方希望に應ず。

ト、各種學術、文化、思想團體との連絡提携

以上われらが、何を言はむとし何をなさむとしつゝあるかは、簡にして要を盡せりとは言ひがたきも、略々之を傳ふるに足るべし。それは必ずしも萬人の同意を得べしとも思はず、舉世滔々、國策順應に寧日なきの時、むしろ平地に波瀾を起すの類に非ずや、この怪訝を抱かる、向も少なからざるべし。

われら自身、自ら揣らすして、我見に執し、公正を失するやなきを懼れ、つねに國論の趨向と自己の信念とを對決分析して怠らず、而も遂に所信に變更を加ふるの要なきを悲しむ。

こゝに現下國情の機微に思ひを潜め、憂心禁じがたきものあらむ人士の前に、自己を紹介する所以なり。（昭和十七年六月十五日誌）

（註一）

三・一五、四・一六事件 前後の日本共產黨活動事情。

一、大正十年八月 秘密結社「曉民共產黨」即ち日本初の共產黨生る。

一、大正十五年十二月 第二次共產黨創設さる。（於、五色溫泉）

一、大正十四年十二月一日 京大事件

一、三・一五事件 大正十五年再建された日本共產黨は昭和二年七月モスコに於て開催され

たコミンテルンの世界大會に於ける「日本に關する七月テーゼ」によつて組織及び活動方針を變更し、その基礎を工場及び農村に於き、この方面の赤化が急激化したため、昭和三年三月十五日遂に全國一齊檢舉が行なはれ

た。これが三・一五事件と呼ばれ、第二次共産黨の大檢舉である。被檢舉
黨員一千餘名。

二、四・一六事件

昭和四年四月十六日再建共産黨全國一齊檢舉。被檢舉人員二百餘名。

一、其の後昭和五年一月於
和歌山共産黨擴大委員會

二月二十六日、全國約千五百名檢舉。

昭和五年二月——十一月、大阪地方委員會關係者五百名檢舉。

昭和六年八月二十六日、關西方面共産黨一齊檢舉。八・二六事件。

(註 二)

黒上正一郎先生

遺著、「聖徳太子の信仰思想と、日本文化創業」及び遺歌集あり。



昭和十七年七月三日印刷
昭和十七年七月五日發行

〔非賣品〕

發行者 大阪市西區榎上通二丁目十一
小山和雄

印刷所 大阪市西區土佐堀通一丁目十二
永井日英堂印刷所
(西大三四)

發行所 大阪市西區榎上通二丁目十一番地
精神科學研究所大阪事務所
電話土佐堀④七六八九番

